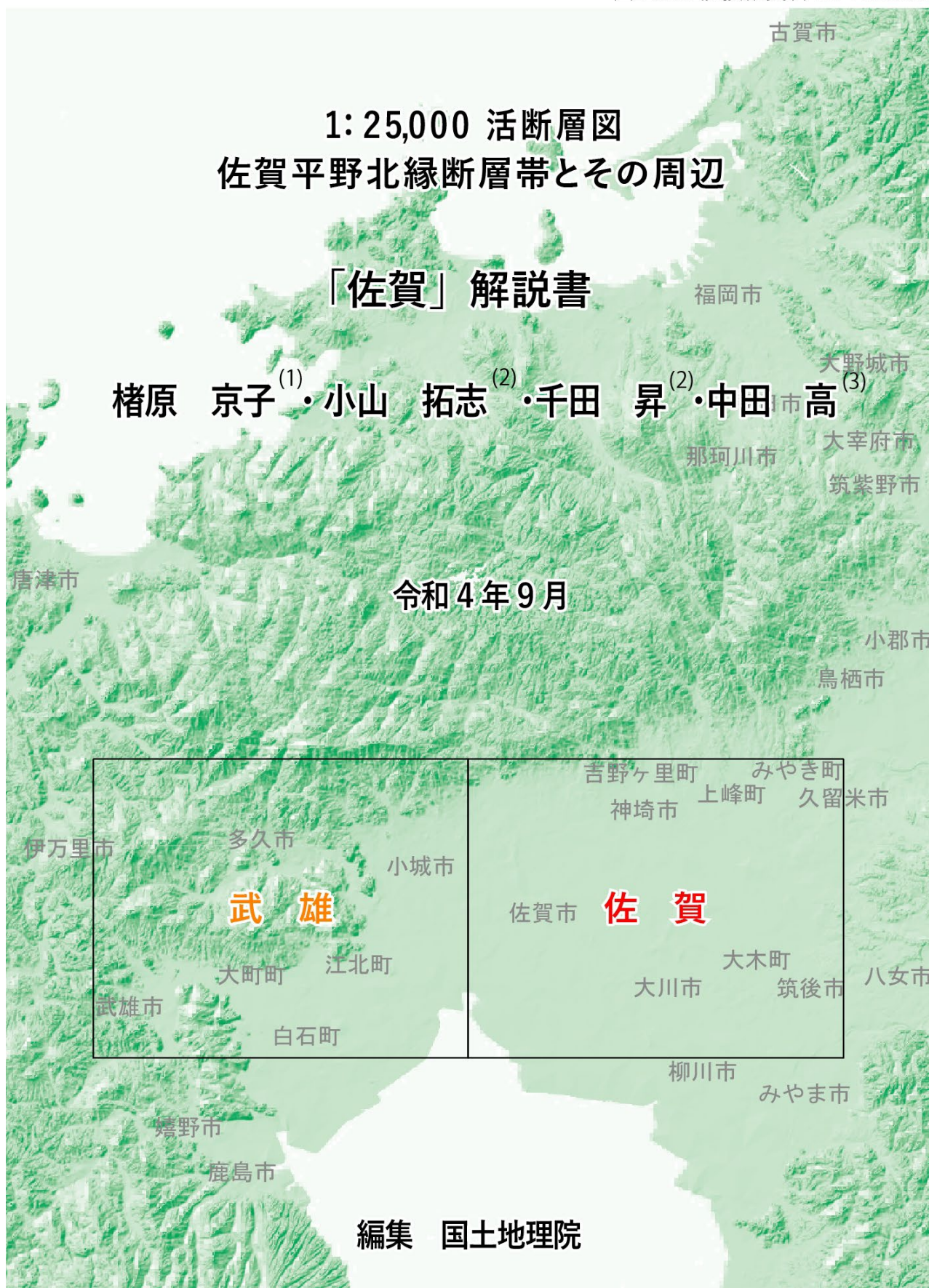


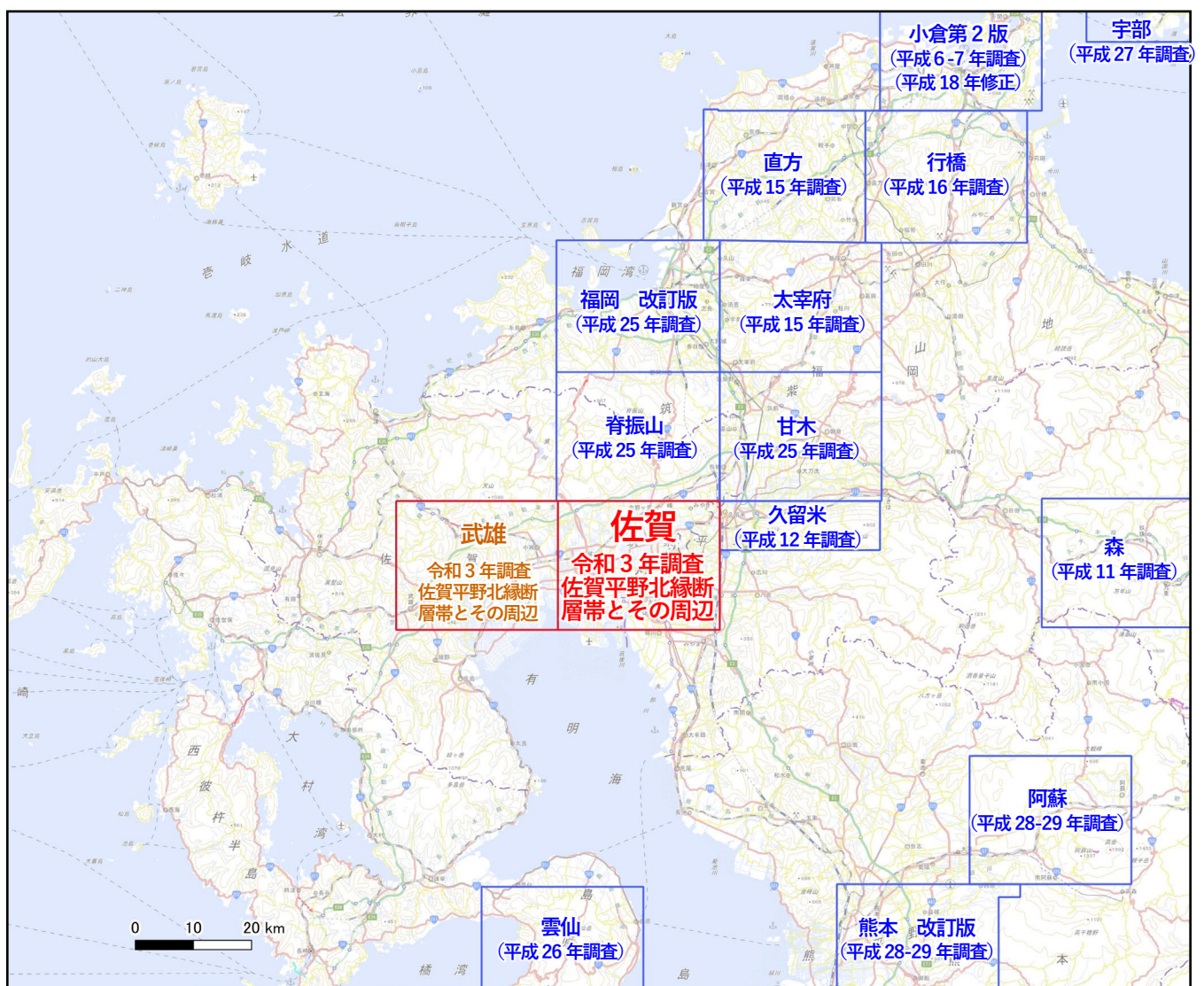


(1) 山口大学, (2) 大分大学, (3) 広島大学

目 次

1:25,000 活断層図 佐賀平野北縁断層帯とその周辺「佐賀」解説書

1. 城原 断層 ^{じょうばる}	2
2. 佐賀市 島崎 ^{しまさき} から同市 大和町 ^{やまとちようかわかみ} 川上 に至る断層	5
3. みやき町 中津隈 ^{なかつくま} 付近の断層	6
4. 筑後市 西牟田 ^{にしむた} 付近の断層の断層	7
引用文献	9
使用空中写真，使用航空レーザ測量データ及び検討委員会等	10
付図（断層索引図）	12



□ 令和3年調査図郭 □ 令和2年以前の調査図郭

1:25,000 活断層図「佐賀」作成位置図

1:25,000 活断層図 佐賀平野北縁断層帯とその周辺「佐賀」解説書

佐賀平野北縁断層帯は、北側が相対的に隆起する正断層である可能性が指摘されている活断層帯で、変動地形に基づいて地表で確認できる活断層と地質構造や重力異常の急変帯に基づいて推定される活断層とに大別される（地震調査研究推進本部地震調査委員会，2013）。前者の活断層は、佐賀県小城市小城市松尾付近から、佐賀市、神埼市を経て、神埼郡吉野ヶ里町立野付近に至る、ほぼ東西方向に延びる長さ約 22 km の断層帯を構成し、有明海北岸地域の平野とその北側の山地との境界に沿う、男女神社断層、今山一杉町断層、都渡城一川久保断層、山地内に分布する松瀬断層、楮原断層、平野と山地の境界よりも南に分布する城原断層に区分される。一方、後者の活断層には、佐賀市金立町千布付近で阿蘇 4 火砕流（Aso-4：約 8 万 5 千 - 9 万年前；町田・新井，2003）の堆積面が南側に大きく沈み込んでいることから、平野下に伏在していると推定された久富断層（下山ほか，2010）、重力異常の急変帯に基づいて推定される多久市南多久町長尾から小城市・佐賀市を経て神埼市に至る活断層、上峰町からみやき町に至る活断層がある。

これら、佐賀平野北縁断層帯を構成する活断層のうち、本図の範囲には都渡城一川久保断層、城原断層と、久富断層をはじめとする伏在活断層が含まれるが、今回の調査において、伏在活断層の存在を示唆する地形的特徴を見出すことはできなかった。

本図には佐賀平野北縁断層帯を構成する城原断層とその他の推定活断層が記載されている。

以下に、各断層の概要と判読した根拠を記載する（下記の断層ごとの番号及び記号は、巻末の付図（断層索引図）に記載した番号及び記号に対応）。

1. 城原断層

- ・走向 : ほぼ東西
- ・長さ : 約 14 km
- ・断層種別 : 活断層（縦ずれ、活撓曲を含む）、推定活断層を含む
（※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である）

（1）概要

城原断層は、中田・今泉（2002）によって初めて記載された活断層である。その後、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013）によって、平野内に低断層崖が見出されたことで、佐賀市大和町尼寺から吉野ヶ里町吉田に至る長さ約 11 km の活断層とされた。本調査では、さらに東の三養基郡上峰町下坊所付近の活撓曲も城原断層の一部と解釈した。その結果、城原断層は、佐賀市大和町尼寺西町付近を西端として、東北東－西南西方向に延びる、縦ずれ及び活撓曲と推定活断層を含む長さ約 14 km の活断層であると推定された。佐賀市西町付近から神埼市尾崎東分付近までは、直線的な推定活断層が断続的に分布する。この推定活断層に沿った断層変位地形で明瞭なものは少ないが、佐賀市中町、同市花久保、同市櫟の木及び神埼市尾崎東分では、わずかな縦ずれ変位が確認される。神埼市岩田から同市川寄区間は、本断層による変位地形が最も明瞭な区間であり、北側隆起（南側落ち）の変動

崖が認められる。この区間は中田・今泉（2002）が記載した推定活断層にほぼ一致し、城原断層の性状や活動性を解明しようと、今泉ほか（2014）や産業技術総合研究所（2014, 2015）による変動地形調査やボーリング調査、トレンチ調査が行われた区間である。これより東側では神崎市 鶴^{つる} から吉野ヶ里町 辛上^{からかみ}（図郭北端）区間に、相対的に北側隆起（南側落ち）の推定活断層が分布するほか、吉野ヶ里町 田手村^{たてむら} から上峰町下坊所区間には、吉野ヶ里町立野付近で中位段丘面が撓曲するような北側隆起の縦ずれ変位を伴う活断層が認められる。以上のように、城原断層全体としては、断層運動を示す確実な証拠に乏しく、大部分が推定活断層である。

（2）判読根拠

城原断層の主な地点ごとの判読根拠は、次のとおりである。

1a： 佐賀市西町から同市金立町にかけては、脊振^{せふり}山地から流下する河川（現在の巨勢川^{こせがわ}支流）が形成した扇状地性の下位段丘面が広がる。この下位段丘面には東北東—西南西方向に直線的に延びる、切り通し状の地形あるいは北落ちの崖が認められる。切り通し状の地形そのものは、古代の道（官道）の名残である人為改変と考えられるが（佐賀県教育委員会, 1995）、官道より南の下位段丘面が背斜状に高まっている点（ほぼ東西に軸を持ち、北側に急傾斜、南側に緩傾斜の細長い高まり）は、河川的作用や人為改変では説明しがたく、遺跡調査報告書でも南側で地山が高いと記載されていることから判断して、断層運動によって形成された可能性があると考えられる。本図では、背斜状の高まりの北縁に認められる明瞭な北落ちの低崖を断層崖として図示した。ただし、こうした断層変位とみられる地形は、主に下位段丘面上に分布しているのみであり、変位の累積性を示す明瞭な地形的特徴が認められないことから、背斜をつくる断層運動が、最近数十万年間に繰り返されているとは言いがたく、推定活断層と判断した。地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013）では、本図の活断層線よりも南側に活断層が記されているが、それらは本調査で注目した背斜状の高まり南縁をトレースしたものと推察される。また、本断層は、今泉ほか（2018）の推定活断層とほぼ一致する。

1b： 佐賀市 篠木野^{しのぎの} から同市 上和泉^{かみいづみ} にかけては、巨勢川が形成した下位段丘面と扇状地が指交し、下位段丘面の分布が断片的となるが、この下位段丘面には、北に向かって減傾斜する区間が認められる。この減傾斜は、相対的な南側隆起を示す地形的特徴とみられることから 1a と同様の断層運動が及んでいると解釈した。今泉ほか（2018）では、この付近に南側隆起の推定活断層を認定しているが、本調査で認定できた範囲は、その一部である。一方、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013）は、本調査の活断層線の南北に断層線を図示している。その根拠については不明であるが、本調査においては、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013）が指摘した場所に断層変位地形を認めることはできなかった。ただし、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013）が指摘した場所を挟んで、下位段丘面の分布が断片的になったり、相対的に緩傾斜の扇状地面が広く分布しはじめたりと、地形の配置には変化がみられる。このような変化が、断

層運動の傍証である可能性はあると考える。

- 1c： 佐賀市櫛の木付近では、下位段丘面の南端がわずかに南へ撓み下がり、低崖をなしている。この低崖の分布は、周囲の諸河川の流下方向に対して直交し、かつ、直線的である。日本の臨海低地では縄文海進（約 7000 年前頃に、現在に比べて海面が 2～3m 高くなった現象）に伴う海食の崖が残存することがしばしばあるが、このあたりの標高は約 15m と縄文海進時の海面の高さよりも有意に高い。つまり、この低崖は河川や波浪の作用で形成されたとは考えにくく、北側隆起の断層運動によって形成された可能性が高い。ただし、この分布は 1km と非常に短く、変位の累積性を示す特徴に乏しいため、推定活断層と判断した。
- 1d： 神崎市 ^{からこうばる}唐香原 から同市川寄にかけては、山麓線に並行するように、下位段丘面が変位した断層崖が認められる。この断層崖を横断するように実施された群列ボーリングおよびトレンチ調査では、後期更新世以降にこの断層崖を形成した断層が繰り返し活動した証拠が得られている（丸山ほか、2017）。
- 1e： 神崎市神崎町鶴に広がる谷底平野には、ほぼ東西に延びる直線的な低崖が認められる。この低崖を挟んで、北側のみに下位段丘面が分布するなど、相対的に北側が隆起することを示唆する地形となっている。なお、この直線的な低崖は官道の跡とされ、人為改変の影響が強く表れている可能性もあるため、推定活断層とした。
- 1f： 吉野ヶ里町立野付近では、自衛隊駐屯地が立地する中位段丘面上に、南に向かって撓み下がる崖が認められる。崖は開析谷や諸河川の流下方向とは直交して、直線的に延びる。したがって、この崖は河川による侵食では説明しがたく、崖を挟んだ北側を相対的に隆起させる断層運動によって形成された撓曲崖である可能性が高い。

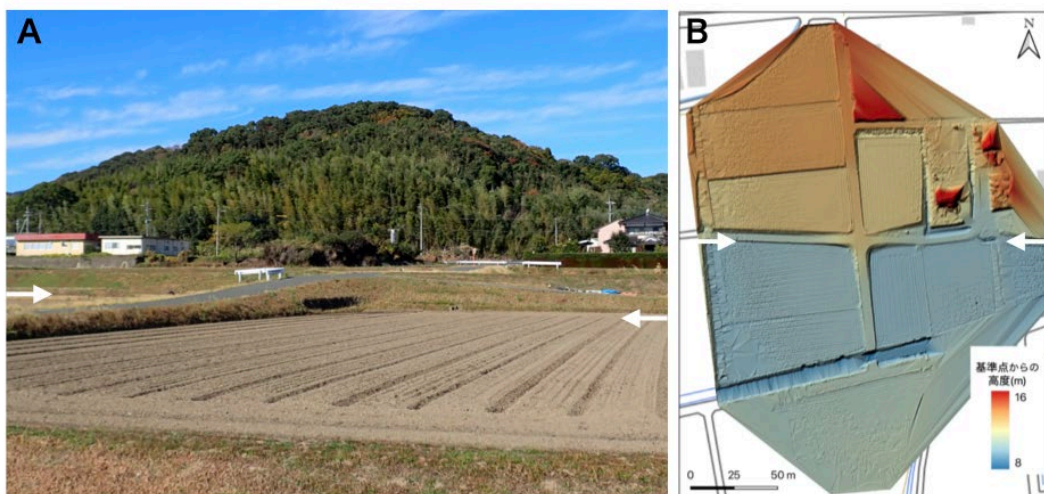


図1 城原断層の断層崖

A:城原断層の撓曲崖（2021年11月28日楳原京子撮影）、B：簡易型LiDARによる計測結

果（岩佐佳哉氏提供）、矢印は断層通過位置。写真中央の道路沿いで群列ボーリング調査、写真右端でトレンチ調査が実施された。

その他、推定活断層としては、佐賀市^{しまさき} 島崎 から同市^{やまとちょうかわかみ} 大和町 川上 に至る断層、みやき町^{なかつくま} 中津隈 付近の断層と、筑後市^{にしむた} 西牟田 付近の断層が記載されている。

2. 佐賀市^{しまさき} 島崎 から同市^{やまとちょうかわかみ} 大和町 川上 に至る断層

- ・走向 ： 東北東－西南西
- ・長さ ： 約 6 km
- ・断層種別 ： 推定活断層

（※上記の各諸元については、本図内における計測及び確認結果である）

（1）概要

佐賀市島崎から同市大和町川上（図郭西端）まで、東北東－西南西方向に延びる、部分的に縦ずれ変位を伴う長さ約 6 km の 4 条の推定活断層であり、1:25,000 活断層図「武雄」（後藤ほか、2022）図葉の佐賀市^{よこばば} 横馬場の東方の断層に連続する。本断層は、従来の都渡城－川久保断層に相当する。都渡城－川久保断層は、脊振山地と佐賀平野を境し、松山－伊万里構造線に近接したリニアメントであることから活断層として認識されてきた。しかし、その分布は、九州活構造研究会（1989）では山地内の高度不連続に沿った概ね 2 条の並走する断層であるのに対して、活断層研究会（1991）では山地内の高度不連続を繋ぐ 1 条の直線的な断層、下山ほか（2010）では概ね九州活構造研究会（1989）を踏襲しているものの、嘉瀬川^{かせがわ} 左岸の北側の断層を地質断層、南側を活断層と再定義するなど、その解釈は定まっていない。

それは変位地形が明瞭ではないこと、断層の位置が佐賀花崗岩と三郡変成岩の境界、あるいは三郡変成岩と三田川層との境界に一致するなど、組織地形としての性格が強く表れていることが要因であると考えられる。本調査では、詳細 DEM を活用しながら山地内の微細な地形を確認し、断層線のつなぎ方についても検討を重ねた。結果的に、断層のトレースを改めた。

（2）判読根拠

佐賀市島崎付近から同市大和町川上に至る断層の主な地点ごとの判読根拠は、次のとおりである。

2a： 「武雄」図幅（後藤ほか、2022）の推定活断層の延長にあり、山麓線から続く鞍部と高度不連続が断層変位を示す可能性があるが、段丘面や扇状地面上に変位の累積性が認められないことから、推定活断層と判断した。九州活構造研究会（1989）および下山ほか（2010）の都渡城－川久保断層の一部にほぼ一致する。

2b： 佐賀市^{みづかみ} 水上 から同市都渡城にかけては、山麓付近に尾根の高度不連続や、嘉瀬川および周囲の小河川が形成した扇状地性の段丘面に、南側が低下する崖が認められる。崖の

一部は河川の侵食によるものの可能性があるが、河川の流下方向とは直交する方向で、直線性も高いことから断層運動によって形成された可能性があるかと判断した。ただし、高度不連続や崖の連続性はやや乏しく、高度差以外の断層変位をうかがわせる地形がないため、推定活断層と判断した。北側の断層トレースの西半分は、下山ほか（2010）の都渡城－川久保断層の一部にほぼ一致する。

2c： 上記 2b の東方延長には、直線的な山麓線に沿って、2b と同様に南側が低下する地形が連続する。また、佐賀市 大門^{だいもん} 西方には連続する鞍部列と共に、谷が右屈曲している様子が確認された。本地域の広域的な応力場と推定活断層の走向から想定される横ずれの変位様式は、右横ずれであることから、上記の谷屈曲も断層運動によって生じたと可能性があるため、推定活断層と判断した。

2d： 佐賀市大門東方から佐賀市島崎にかけては、西北西－東南東方向の直線的な山麓線に沿って南側が低下する地形が認められ、大門付近の谷には左屈曲も認められる。これらの地形は本図葉北の「脊振山」（後藤ほか，2014）図郭に認められた松瀬断層・楮原断層と同走向で断層変位地形も酷似している。このことから、これらの地形が断層運動によって形成された可能性があるかと判断した。ただし、屈曲谷が1本と限られ、変位の系統性や累積性が乏しいことから推定活断層と判断した。

3. みやき町 中津隈^{なかつくま} 付近の断層

- ・走向 ： 東北東－西南西
- ・長さ ： 約 4 km
- ・断層種別 ： 推定活断層

（1）概要

佐賀県三養基郡みやき町中津隈^{なかつくま}付近に位置し、みやき町 石貝^{いしがい} から同町 中津隈西^{なかつくまにし} まで、東北東－西南西方向に延びる、縦ずれ変位を伴う長さ約 4 km の推定活断層である。本断層の位置は、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013）が重力異常に基づいて推定した活断層に近いが、本断層の断層変位地形は微弱なもので、走向も異なることから、これらが直接的に結びつく活構造であるとは考えにくい。

（2）判読根拠

みやき町中津隈付近の断層の主な地点の判読根拠は、次のとおりである。

3a： みやき町中津隈付近には、やや開析された中位段丘面・上位段丘面が分布する。これらの段丘の南縁は尾根状に延びるのではなく、尾根の途中が直線的に切られているような形状をなす。このような形態は、筑後川による侵食でも形成されうるが、蛇行跡から類推される侵食域よりも広域におよぶことから、山地境界にある断層によって三角末端面が形成されるように、こうした端部の形状が断層運動によってもたらされたとも考え

られる。また、これらの段丘崖の麓に分布する扇状地性の下位段丘面の南縁も直線的で、低崖を挟んで谷底平野と接する場所がみられる。一部には崖際で段丘面がやや上に凸の形状をなし、撓みも伴っているように見える。以上のことから、段丘崖付近に北側隆起の断層が存在していると解釈した。なお、上記の地形的特徴は、断層運動を示す確実な証拠としては、不十分であることから、推定活断層とした。

4. 筑後市 西牟田^{にしむた} 付近の断層

- ・走向 : ほぼ南北
- ・長さ : 約 6 km
- ・断層種別 : 推定活断層

(1) 概要

福岡県筑後市 西牟田^{にしむた} 付近に位置し、久留米市 五ツ又^{いつまた} から筑後市 和泉中^{いづみなか} まで、ほぼ南北方向に延びる、縦ずれ変位を伴う長さ約 6 km の 4 条の推定活断層であり、筑後川左岸側に広がる段丘群と谷底平野とを画す。

(2) 判読根拠

筑後市西牟田付近の断層の主な地点ごとの判読根拠は、次のとおりである。

4a: 久留米市 子犬塚^{こいぬつか} から犬塚駅南部にかけて、下位段丘面が分布する。その段丘面は若干の膨らみを伴い、段丘西側の段丘崖は開析谷や筑後川の流下方向とは斜交する向きに形成されている。また、段丘を開析する谷の谷底には東側が相対的に上がる、わずかな傾斜変換も認められる。一般に火砕流堆積物からなる段丘などでは、段丘面上に滑らかな凹凸が認められることがあるが、本段丘面は砂礫および砂・シルトで構成され、Aso-4 火砕流堆積物も地表下-5m 以深に埋没している。したがって、上記の地形的特徴は、単に河川等による侵食や火砕流堆積面にみられる凹凸を捉えたものではなく、東側を隆起させる断層運動によって形成された可能性がある。

4b: 久留米市五ツ又から筑後市 久保^{くぼ} にかけては、概ね西流する河川によって形成された扇状地性の段丘面群に、東側が上がる崖が認められる。久留米市五ツ又付近の崖は撓みを伴い、撓曲崖の様相を呈している(図 2)。崖の高さは下位段丘面よりも中位段丘面で高く、変位の累積性と解釈することも可能である。崖の延びる方向は、ほぼ南北であり単純な河川による侵食で形成された地形とは考えにくい。また、4a と同様に、これらが火砕流堆積面の凹凸ではないことから、これらの地形が断層運動によって形成された可能性がある。

4c: 筑後市 高江^{たかえ} から同市和泉中にかけては、段丘と氾濫原との境界に、ほぼ沿うように低崖が認められる。山ノ井川右岸側の崖は、大半が山ノ井川の侵食崖とみられるが、筑後市 富重^{とみしげ} 付近ではやや撓曲を伴う崖であること、4a から系統的に認められる、相対的

に東側が高いという地形的特徴をもつことから、位置不明瞭の推定活断層を認定した。また、山ノ井川以南では、筑後市和泉西から同市長崎へと続く下位段丘面の撓みと、同市和泉中付近の水田地帯に高低差が認められることから、断層が2条に分岐している可能性がある。これらはいずれも相対的な東側隆起を示し、大局的には、4a 付近から連続する断層を反映していると思われる。

以上のように、筑後市西牟田付近には、断層運動によって形成されたと考えられる東側隆起を示す地形が断続的に認められる。その地形的特徴からは、断層像として逆断層が類推されるものの、これまで本地域において逆断層の指摘はない。これらの地形が活断層によるものかどうかを明確にするためには、精査が必要であるが、合わせて、本地域において逆断層が形成される地質学的背景についても検討する必要がある。

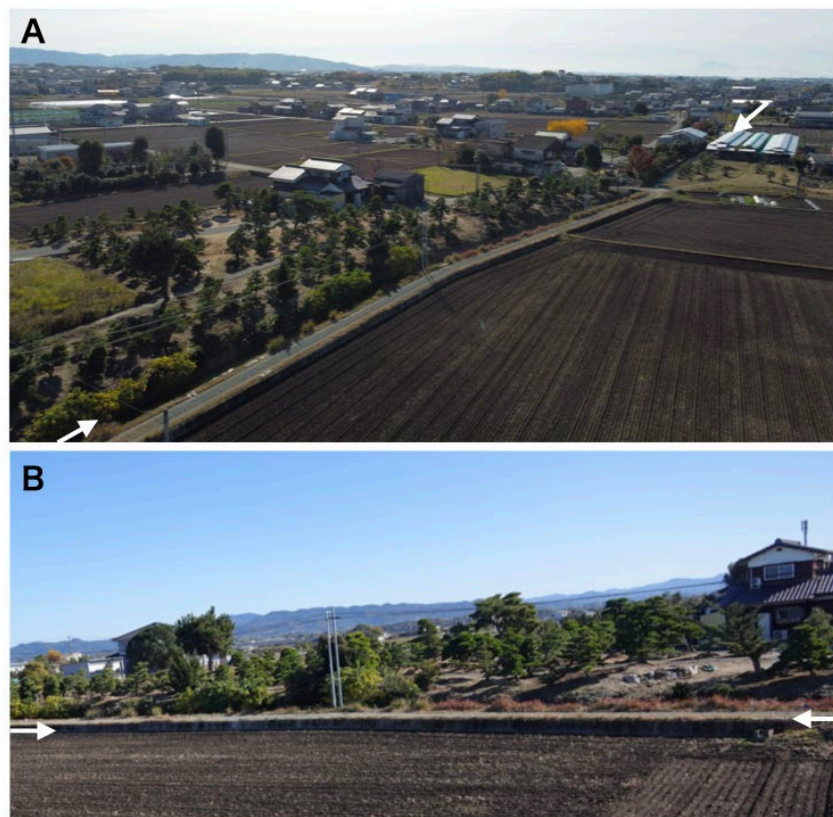


図2 久留米市五ッ又における下位段丘面の撓曲

A:上空からの写真 (2021 年 11 月 28 日小山拓志撮影), B:撓曲崖正面からの写真
(2021 年 11 月 28 日楮原京子撮影)。矢印は断層通過位置。

謝辞 本図幅を作成するにあたり、現地調査およびクロスチェックにおいて広島大学准教授・後藤秀昭氏、同大学大学院・岩佐佳哉氏にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

(山口大学准教授 楮原 京子)

(大分大学准教授 小山 拓志)

(大分大学名誉教授 千田 昇)

(広島大学名誉教授 中田 高)

引用文献

- 後藤秀昭・岡田真介・中田 高・八木浩司 (2014) : 1 : 25,000 都市圏活断層図「背振山」. 国土地理院.
- 後藤秀昭・楮原京子・千田 昇・中田 高 (2022) : 1:25,000 活断層図「武雄」. 国土地理院.
- 今泉俊文・楮原京子・宮内崇裕 (2014) : 佐賀平野北縁の活断層. 月刊地球, 36 (8), 297-302.
- 今泉俊文・宮内崇裕・堤 浩之・中田 高編 (2018) : 「活断層詳細デジタルマップ [新編]」. 東京大学出版会, 154p+USB メモリ.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2013) : 佐賀平野北縁断層帯の長期評価. 12p.
https://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_8.pdf (2022 年 2 月 28 日閲覧)
- 活断層研究会編 (1991) : 「新編日本の活断層—分布図と資料—」. 東京大学出版会, 437p.
- 九州活構造研究会編 (1989) : 「九州の活構造」. 東京大学出版会, 553p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) : 「新編 火山灰アトラス 日本列島とその周辺」. 360p.
- 丸山 正・齋藤 勝・末廣匡基 (2017) : 反射法地震探査, 群列ボーリングおよびトレンチ調査に基づく佐賀平野北縁断層帯の浅部形状および第四紀後期の活動性. 活断層・古地震研究報告, 17, 39-89.
- 中田 高・今泉俊文編 (2002) : 「活断層詳細デジタルマップ」. 東京大学出版会, 68p+DVD-ROM2 枚+付図 1 葉.
- 佐賀県教育委員会 (1995) : 「古代官道・西海道肥前路」. 106p.
- 産業技術総合研究所 (2014) : 地域評価のための活断層調査 (九州地域) 平成 25 年度成果報告書「佐賀平野北縁断層帯」. 42p.
- 産業技術総合研究所 (2015) : 地域評価のための活断層調査 (九州地域) 平成 26 年度成果報告書「佐賀平野北縁断層帯」. 53p.
- 下山正一・松浦浩久・日野剛徳 (2010) : 「佐賀地域の地質」. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅). 産業技術総合研究所地質調査総合センター, 97p.

使用空中写真、使用航空レーザ測量データ及び検討委員会等

1) 使用空中写真

撮影計画機関（種別）	撮影縮尺	地区番号又はコース番号
米軍（モノクロ）	1/40,000	M106, M118, M364, M663, M665, M742
米軍（モノクロ）	1/10,000	R242(No.2), R420, R438(No.2), R464
国土地理院（カラー）	1/10,000	CKU-74-22, CKU-74-23
国土地理院（モノクロ）	1/10,000	KU-62-1, KU-62-6
国土地理院（モノクロ）	1/20,000	KU-63-8X, KU-67-4X

2) 使用航空レーザ測量データ

国土地理院が管理する航空レーザ測量データから 1mDEM を作成して使用.

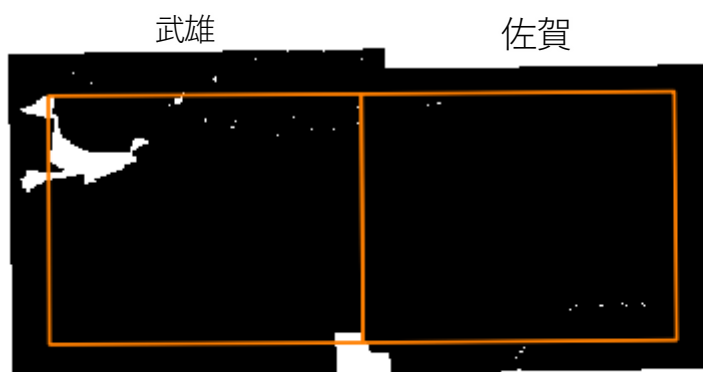


図1 航空レーザ測量データ使用範囲（黒色部分）.

なお、黒色部分以外は「基盤地図情報数値標高モデル（5mDEM ないし 10mDEM）」を使用した.

3) 全国活断層帯情報整備検討委員会

a. 委員会等の開催

第1回委員会	令和3年9月6日(月)	Web 会議
第1回全体部会（クロスチェック）	令和3年8月26日(木)	Web 会議
地域部会（クロスチェック）	令和3年11月27日(土)	レンタル会議室 サンシティ
第2回委員会・第2回全体部会（クロスチェック）	令和3年12月20日(月)	イオンコンパス東京 八重洲会議室

b. 佐賀平野北縁断層帯とその周辺「佐賀」の作成委員（令和3年度）

図 名	氏 名	所 属
佐賀	○ 楮原 京子	山口大学准教授
	小山 拓志	大分大学准教授
	千田 昇	大分大学名誉教授
	中田 高	広島大学名誉教授
	(岩佐 佳哉)	広島大学大学院生

○印は、全体のとりまとめを担当した委員，その他の委員は五十音順、()内は調査協力者.

4) 連絡先

国土地理院応用地理部地理情報処理課
〒305－0811 茨城県つくば市北郷1番
電話：029（864）1111（代表）

5) 引用する場合の記載例

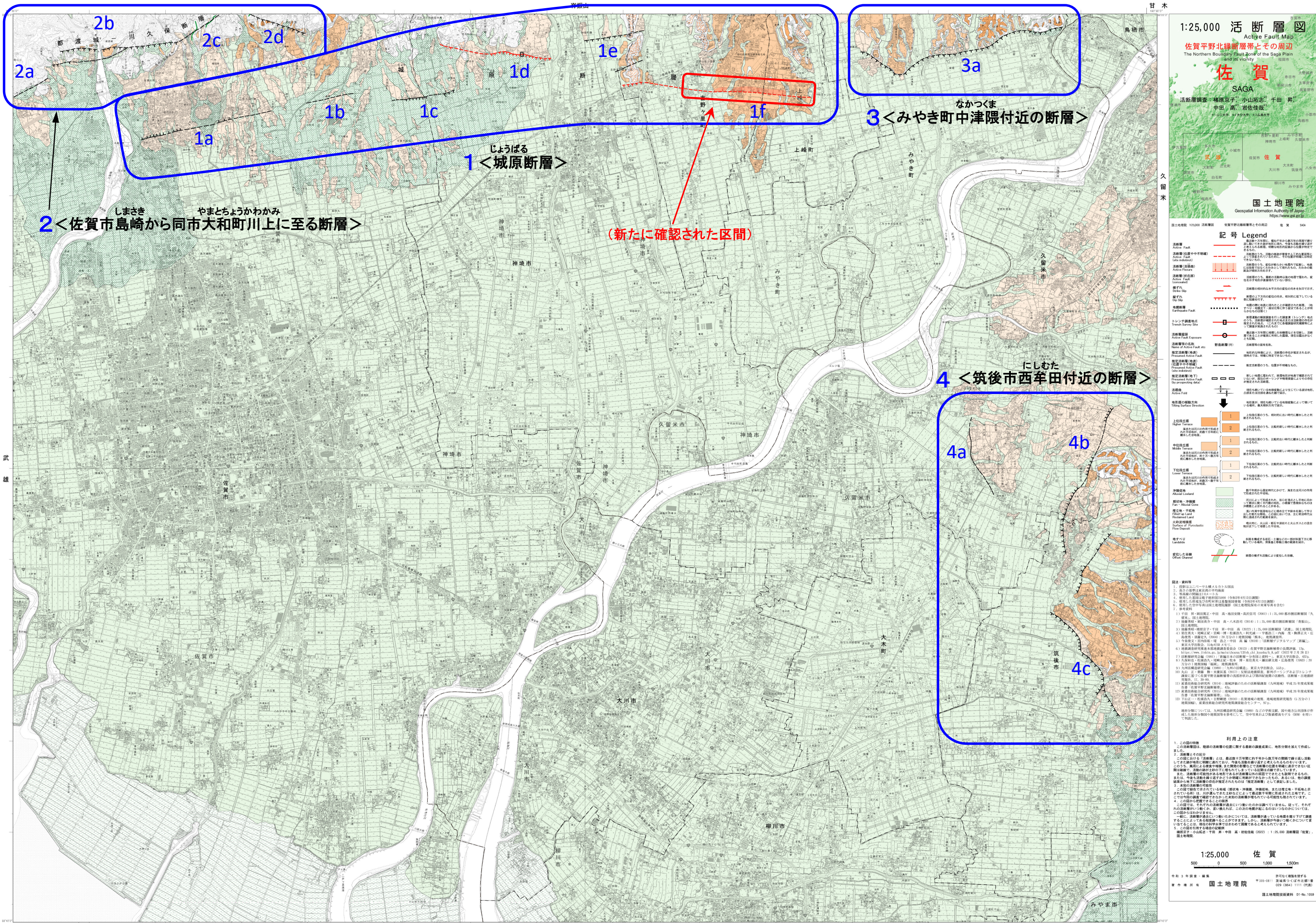
a. 図を引用する場合

楮原京子・小山拓志・千田 昇・中田 高・岩佐佳哉（2022）：1:25,000活断層図「佐賀」，国土地理院.

b. 解説書を引用する場合

楮原京子・小山拓志・千田 昇・中田 高（2022）：1:25,000活断層図 佐賀平野北縁断層帯とその周辺「佐賀」解説書，国土地理院，12p.

【 付図（断層索引図）】



利用上の注意

1. この図の特徴
この活断層図は、地質調査院の調査結果に基づき、地形図を基に作成されたものである。

2. 活断層とその区分
この図における「活断層」とは、最近数千年間にわたる地殻変動の痕跡が確認され、今後も活動の可能性があるものとする。ただし、この図には、地殻変動の痕跡が確認されていないが、過去の地殻変動の痕跡が確認されているものも含まれている。

3. 活断層の存在可能性
この図で示されている活断層（断層）は、地質調査院の調査結果に基づき、地形図を基に作成されたものである。ただし、この図には、地殻変動の痕跡が確認されていないが、過去の地殻変動の痕跡が確認されているものも含まれている。

4. この図の用途
この図は、地殻変動の調査結果に基づき、地形図を基に作成されたものである。ただし、この図には、地殻変動の痕跡が確認されていないが、過去の地殻変動の痕跡が確認されているものも含まれている。

5. この図の利用
この図は、地殻変動の調査結果に基づき、地形図を基に作成されたものである。ただし、この図には、地殻変動の痕跡が確認されていないが、過去の地殻変動の痕跡が確認されているものも含まれている。